

## 宗教論争に負けないように学習した本より

### 「今時の若者論」より

- ・ 「人間は何の為に生きているのか？」
  - ・ 欲望にはてしなく流されるときより、立ちなおるときに「他力」を求める。現代の無気力な生活
- (創価学会の分析)
- ・ 学会の青年のような意志、「社会を見る」……………
  - ・ 「無気力な青年をして立たさねばならない。正義の為には断固戦う力を呼び起こす」
  - ・ 「青年よ、一人立て！二人は必ず立たん。三人は又続くであろう。かくして国に十万の国土あらば、苦悩の民衆を救いうること、火を見るよりも明らかである。青年は国の柱である。日本の眼目である。」
  - ・ 「新しき世紀を創るものは熱と力である。奮起せよ！青年諸氏よ。戦おうではないか！青年諸氏よ。」
  - ・ もと(創価学会)が人生観的、世界観的な哲学から出発しているだけに、創価学会の青年たちは、理論好きであり、人生論……………理論に勝つ喜び…………
  - ・ 「生きることへの疑問」
  - ・ 目先の目的
    - 万人が幸福になることができるのだという大きな理想、規律の快感と信条の安定感
  - ・ 「反安保、非革新」
  - ・ 科学的、合理的な考え方を身につけた者が、現実の社会生活に矛盾を感じ……………。
  - ・ 自分で判断
  - ・ 不況の原因が「政治だと気づいた人たちが—————  
学歴でないエリート  
かなりの知的水準

### 続「今時の若者論」より

青年には青年なりの夢が有る。しかしその夢は社会国家につながっていない。

何故か？

若者について

- ・ 若者は常に社会に対して未熟であればこそ、創造力を又持っている。未熟を責めることが多いと、創造力はつぶされる。
- ・ 学歴が、将来のコースの安定と生活の保証をしている。しかしそれを責めることは誰も出来ない。

- ・ その学歴を買う経営者であり、学閥を温存させている官僚体制であり、それを仕方のない事と認めて受験戦争をあおりたてる親たちである。
- ・ 現在の青年はこれでいいのか？
- ・ 青年みずからの手で打破できない矛盾、それが政治とか経済のししくみにからんでの教育制度であるという事実を承知した上での矛盾に、彼らが真正面にぶつかりながら「おとな」になっているという・・・・・・・・・・。
- ・ 教育年限の長短によつての格付け。
- ・ 家庭との分離は遅れる
- ・ 親からの「心理的離乳」をさまたげている。
- ・ 進学コースのベルトコンベヤーに乗ったもう一方の青年。気軽な学生生活
- ・ 家庭の階級の上昇を願う 心理によつて
- ・ 若者を育てない大人が多すぎる
- ・ 青年がみずから進むコースは、しだいに失われている
- ・ 親が願い、指し示す階段を黙々と若者が増大している
- ・ 隷属する青年の飛躍的増大
- ・ 内側から青年の精神を弱めている事実
- ・ テスト成績のいい者を、大企業は好んで採用している。「家庭」「学校」「就職」の余りにも単純なコースに・・・・。
- ・ (民青とか、学会とか、根っこの会とか)それらには目的が有り過ぎる
- ・ 天下国家の志を表面にかかげて、その実己の私腹を肥やしたり、善良な人々に迷惑をかけた過去の「大志」青年より、よっぽど立派である。  
小さいながらも地道な夢を持つこと  
しかし現代青年の夢は、危険をおそれ、抵抗をさけている
- ・ 自分の持つ夢を予想される危険にもかかわらず実行しようとする所に、若い世代の生きがいの発見と人生における鍛錬がある。
- ・ 学歴偏重の社会に甘え、みずからの人生を探求する態度を失ってしまったら、やがては、外側からの圧力に対して抵抗できない、夢のない人間になってしまう。
- ・ 現代社会の「サラリーマン」中心の職業観
- ・ 現代の大人は、自ら成人としての果たすべき努力や工夫に欠けている
- ・ 労働力としての若者・・・・・・・・・・
- ・ 中学卒の低賃金労働力
- ・ 今までは旧世代に挑戦する日常のたたかいがあつて、その中での、ささやかな勝利や、ささやかな敗北、挫折の体験のうえに若者は成長して来た。  
 若者はこれでいいのか！！

## 「現代教育学（岩波）」より

### 高校生の問題

学校の服装規制に対する反発や校舎使用規定に対する抗議、多くの学校の普遍的現象  
学園民主化運動は卒業式、運動会の自主的運営の主張にまで発展することもある。

面白くない学校生活に対する反発から生まれている。

この様な反発は、生徒が現在立っている個人的立場からの解放意識を社会的立場のそれに転化させる重要な芽として正しく評価することが必要であり、今後の生活指導の課題は、それをどう育てるかにかかっている。

生徒は、現在の学校生活に矛盾を感じ、それに反発しながらも、反発のエネルギーを組織して矛盾の解決をはかる場所として、生徒会やホームルームの活動の意義を自覚するに至っていない。

勤評体制の進行にともない、最近とくに強まっている。

### 現状改革の芽

このような生徒の集団活動の低調さは、容易に打ち破ることが出来ない困難な課題である。しかし一方では、抑圧の強い中で、あるいは抑圧が強ければこそ、それに反発して、具体的な要求活動を軸に生徒が自主的な集団活動を芽生えさせ発展させている所もある。

もちろん、生徒のこのような要求活動が正しく成長する為には、教師の援助と激励が必要である。

「御用生徒会」

校内での日常的な要求と、広い社会の問題とのつながりに気付く事が必要である。

## 「現代教育学 青年の問題」より

### 高校生の問題

高校生には二つの面がある。

- 1 瞬間的な快樂に走る型
- 2 国や社会の現実問題と対決して社会活動に情熱をかたむける型

この二つの面は反発し合うように見えるが、実はその奥底に権利の感覚、解放要求を共通項として持っている。もしそれらが適切な指導と激励の下に組織され、正しく育てられるならば、日本の民主主義を進める大きな力となる可能性をふくんでいる。

### 高校教育の基本的課題

高校生のエネルギーをどう評価し、どのように組織して行けば良いのかを明らかにすること。現在の高校体制は、多分に生徒のエネルギーを抑圧している。

高校生の読書範囲が大学生や一般成人に比べて狭い

敏感な成長期にある高校生

日本の将来にとって重大な問題

現在の高校生をとりまく生活条件の結果

受験準備の強固な体制がいかに高校生活を不毛にしているか！

「順応か抵抗かの葛藤」

受験勉強は人生修行か？ 否

学習の目的を度外視した受験準備 これでもいいのか

将来の展望や社会的責任の自覚が目覚めない。

& 当面の大学進学の意味さえ不問に付される。

何の為に大学へ入るか？

何の為に勉強するのか？

### 「日本の新興宗教」より

新興宗教が科学を認めるとは言っても、それは、自然科学、精神科学の分野にかぎられている。

新興宗教は人間の生命の問題、すなわち生活の問題について答える所から始まっている。

人間の生活を具体的に分析する社会科学とは対抗関係にある。

二つの結論

- 1 新興宗教の教理乃ち、世界観、人生観、生活規律という一連の体系に対決して、これを打ち破ろうすれば、たんに抽象的な唯物論的世界観だけを主張するのでもなく、あるいは医学その他自然科学的な唯物論にもとづく科学的啓蒙だけでもなく、社会科学にもとづく具体的な人生観と生活規律をうちださなければならない。

人生記録雑誌の読者グループには、新興宗教からの影響がほとんどない。

- 2 社会科学的な理論に接した場合「自分が真理だと信じている教えと食い違っているから間違いである」と積極的に反対する人間が生まれ、あるいは、それについては全然理解のできない人間や全く関心を持たない人間になる。そこで、信者はもちろん、信者から育った幹部も社会科学的な目を持たないから、教団の発展の為に誰でも利用しよう、誰でも利用させてやろうという形で運動を進めて行く。

保守反動陣営のお手伝い。

- ・ 新興宗教は「実証」を強調する。しかし、この実証として示されるものは、単に現象形態を指すにとどまっている。その現象を導き出した本質、あるいは現象と本質との間の矛盾を正しく指摘するものではない。彼らのいう現証は、その現象を生み出した客観的な本質的な関係を切りはなし、これを教理の主張している空想的・主観的な関

係に結びつける。

- ・ たとえば創価学会では、死人にお題目をあげると死相が一変して福相となるというが、これは医学的にみて死後硬直から腐敗の過程に入ったときの現象である。そこには客観的にきわめて複雑に法則性が働いている。その法則性を対象の中でつかみ、その対象の中でたぐってゆくのではなく、現象とお題目との間に空想的な関係を設定し、しかも自分の方から能動的にそれを作り出すという形で解釈する。
- ・ 客観的な世界から論理をつかみとる能力が欠如して来る。教団の教えてくれる論理を適用する能力は向上するが、それは自分の力で対象の中に論理を発見してゆく能力ではない。
- ・ 新興宗教では百人の信者のうちたった一人治っても、あの宗教では治ると大評判になる。